

## 〈書評〉

染田秀藤・友枝啓泰、『アンデスの記録者ワマン・ポマ：インディオが描いた〈真実〉』平凡社，1992年，vi+286ページ

熊井茂行 (明治学院大学)

本書は、日本の代表的なアンデス研究者である歴史学者染田秀藤と文化人類学者友枝啓泰の共著による、中央アンデスの植民地時代初期についての研究書である。その素材は、当時のアンデス原住民の記録のひとつ、フェリペ・ワマン・ポマ・デ・アヤラ（以下、ポマと略記）の『新しい記録と良き統治』である。著者たちの目標は、ポマの記録をとおして、当時のアンデスの一原住民が植民地支配とキリスト教の伝道に直面して、その意味についておこなった思索とその背景を解明することにある。

中央アンデスの先スペイン期と「征服」（侵略）期の原住民社会にかんする歴史史料にもとづく研究は、3つにわけられるだろう。第1は、西洋中心主義の立場にたち、スペイン人クロニスタの記録をもちいたアンデスの文明と「征服」の歴史の再構成であり、プレスコットの研究がその典型としてあげられる。第2は、異文化としてのアンデス文明の認識にもとづいた歴史再構成、すなわちアンデス原住民社会の実証的なエスノヒストリー研究である。ピースと増田義郎の著書によって、その最新の成果をうかがうことができる。そして第3は、原住民の視点から、アンデス文明とその歴史の認識をあきらかにし、またスペインによる「征服」の意味をとうものである。それは、西洋中心主義の第1の歴史研究の相対化を意味するものでもある。ワシュテルなどがこの種の研究としてあげられる。

本書は、この第3の範疇に属するものであり、日本人の研究者による最

初の重要な成果といえる。

ところで、このような原住民の視点からアンデス文明とスペインによる「征服」と植民地支配の意味とを考察するとき、その資料はわずかしかのこされていない。そのひとつが、本書でとりあげられている、ポマの『新しい記録と良き統治』である。

ポマの『新しい記録と良き統治』は、1908年にデンマークの王立図書館で手稿が発見され、1936年にパリでその写真版が出版された。以後、ポマと『新しい記録と良き統治』について、おおくの研究者による研究が積みかさねられてきた。研究の初期には、ポラス・バルネチェアらの研究者によって、『新しい記録と良き統治』は、概して事実のあやまりや矛盾がおおく、資料的な価値はひくいとされてきた。これにたいして、ムラは、ポマの記述をインカ時代についての貴重な民族誌的データを提供するものとして評価した。

ポマと『新しい記録と良き統治』の研究にとって画期的だったのは、1970年代なかば以降のロレナ・アドルノによる、手稿の綿密な調査とそれにもとづいた研究と校訂版の出版であった。アンデスにおけるポマの『新しい記録と良き統治』をもとにした上記第3の範疇の研究の基礎は、アドルノによってすえられたといえる。本書の染田の執筆になる部分も、基本的にアドルノの研究成果にもとづいたものといえる。

『新しい記録と良き統治』は、1614年から1615年にかけて編纂・完成されたもので、1179ページ（実際は1189ページ）からなり、そのうちの456ページは挿絵からなっている。その全体は、アドルノにならえば、3部構成となっている。第1部は、〈新しい記録〉で、先インカ期から第11代インカ王ワイナ・カパックまでをあつかっている。第2部は、〈征服〉の部分で、スペイン人の到来からスペイン人の内戦終結までにかかわる。そして第3部は、〈良き統治〉と題され、同時代の植民地社会の記述とポマの提言がのべられている。

本書の内容の紹介のまえに、本書の構成を目次を引用してしめしておきたい。

はじめに

第1部 ワマン・ポマの生涯と作品

第1章 ワマン・ポマの生涯

第2章 『新しい記録と良き統治』

第2部 《征服》の章のテーマ——「征服はなかった」

第1章 ワマン・ポマの描く「征服史」

第2章 捏造された出来事の意味

第3部 ワマン・ポマのイデオロギー

第1章 インディオの窮状とその改善策——国王との架空の対話

第2章 批判と提言のイデオロギー

第4部 テキストとしての『新しい記録と良き統治』

このうち、第1部から第3部を染田が、第4部を友枝が執筆している。また、第2部第1章と第3部第1章は、それぞれポマの〈征服〉と〈良き統治〉のテキストの染田による抄訳・要約である。

本書の構成を一見してあきらかなのは、ポマの『新しい記録と良き統治』の構成との明瞭な対応である。本書の第2部はポマの〈征服〉の部分に、本書の第3部はポマの〈良き統治〉、第4部はポマの〈新しい記録〉の部分に、それぞれ呼応している。そして、本書の第1部は、以上の導入として、ポマとその『新しい記録と良き統治』の紹介にあてられている。また、アンデス原住民社会の研究でしられる文化人類学者の友枝がポマの先スペイン期の部分を、スペインの植民地時代史を専門とする歴史学者の染田がポマの「征服」と植民地時代をあつかった部分を、それぞれ分担している。

第1部では、スペインの征服と支配にたいするポマの視点を理解する目的で、かれの生涯が史実にもとづいて紹介され、また、『新しい記録と良き統治』の執筆の動機が議論されている。染田によれば、ポマの執筆の動機は、スペインの植民地支配と改宗化の実態に直面し、その支配と改宗化の

正当性の根拠を否定するために、インディオがスペイン人以上にキリスト教的な伝統と能力をもつことをしめすことにあった。また、第4部で友枝も指摘しているように、ポマは、文字のもつ支配の道具としての力を認識し、このヨーロッパ文化に特徴的なシンボルをもちいてスペイン人のアンデス理解に反論をおこなうという意図をもっていた。

第2部では、第1章のポマの〈征服〉のテキストの抄訳にもとづいて、〈征服〉にみられるポマの史実に反する記述が、かれのスペインによる「征服」はなかったとする主張をうらづける意味をもっていたことが指摘される。

ポマは、アンデス住民が、軍事的に「征服」されたのではなく、自発的にスペイン国王の支配権を受容した経緯をあきらかにする。また、インディオの歴史はインカ以前にまでさかのぼり、アンデスに流布していたピラコチャ伝説に依拠して、インカ以前にすでに聖バルトロメーによる福音伝道がアンデスにおこなわれていたと、ポマは記述する。植民地時代にもおこなわれていたアンデス住民の偶像崇拜は、その福音伝道ののちに、インカの専制支配がもたらしたものである。さらに、「征服」後に続発したスペイン人の内乱期にも、アンデス住民が一貫して国王側にたったことが強調される。

染田によれば、このようなポマの史実に反する記述は、ラス・カサス理論を踏襲し、キリスト教の伝道を理由にしてスペイン人が「征服」・支配を正当化する権原を否定する目的をもっていた。上述のようなアンデスの住民にとって、たんなる「移住者」(ミティマエス)にすぎないスペイン人キリスト教徒にアンデス世界が支配される理由は、どこにもないのである。

このような主張を「征服」後80年を経過した時期にポマがおこなった目的は、たんにアンデス住民とその文化にたいするスペイン人の人種主義的な偏見を打破するだけではなかった。それは、「スペイン国王を至高の支配者として、アンデスの伝統的な支配体制を復活させる」(本書p. 156。以下同様)という、あきらかに政治的なものであったと、染田は指摘する。

第3部では、この指摘をうけ、第1章に要約・紹介されたポマとスペイン国王との架空の対話にもとづいて、第2章で、ポマが主張するスペイン国王によるペルー支配の本来のありかた、いいかえればスペイン人に支配されないアンデス世界の建設についてのポマの提言が、その背後にあるイデオロギーにさかのぼって検討されている。

スペイン人の「征服」にともなう、原住民人口は激減した。しかし、ポマにとって問題なのは、たんなる人口の減少ではなく、混血とレドゥクション（集住／強制移住）を原因とする、「インディオの」人口の減少であった。また問題なのは、それにとまなうアンデスの伝統的文化の破壊であった。ポマは、これが結果としてスペイン国王の富の喪失につながることを指摘する。そして、このような問題をひきおこしている原因として、腐敗墮落した司祭とスペイン人官吏である「インディオのコレヒドール」とを、ポマは実例をあげてきびしく批判する。

したがって、スペイン国王によるアンデス統治にかんするポマの提言は明瞭である。すなわち、スペイン人とインディオとを分離し、聖俗の支配者としてのスペイン国王の存在は認めながら、アンデスにおける実際の政治的統治をアンデス住民の伝統的な首長にまかせ、またインディオの司祭による自立したキリスト教世界を確立することであった。それによって、アンデスの伝統的な社会体制は再建され、スペイン国王の聖俗両面にわたる世界の君主としての地位が、アンデスのもたらす富を裏づけとして、確立できるとポマは訴えるのである。

「このように見てくれば、ポマが『新しい記録と良き統治』を執筆して、スペイン国王に訴えようとしたことが明らかになってくる。彼は植民地社会の混沌とした状況（逆転した世界）に秩序をもたらす必要性を訴え、スペイン国王にとってペルー王国およびアンデス住民が重要な役割を担った存在であることを強調し、土地と財産を本来の所有者であるアンデス住民へ早急に返還するよう求め、そして、ヨーロッパ人よりもアンデス住民が優れていたことを明らかにした。作品はそれら四つの主張を中心に構成さ

れているが、そのいずれの主張も『征服はなかった』という大前提から導かれたものである。(中略)その意味からすれば、『新しい記録と良き統治』は、(中略)単にスペイン批判の政治的文書ではなく、ヨーロッパ人が創出する自己中心のかつ独善的なイデオロギーに敢然と挑戦した作品だと言えるだろう。」(pp. 227-228)

第4部は、『新しい記録と良き統治』をテキストとし、これを、アンデス文化のコンテキスト、社会的コンテキスト、そしてテキストとして読み解こうとした、友枝のこころみである。そのための例として、それぞれアタワルパの斬首、チャンカ族との戦争、そしておなじ原住民記録者フワン・デ・サントクルス・パチャクティ・ヤムキ・サルカマイワの『ペルー王国の昔の出来事についての報告』などがとりあげられる。

ポマがえがくアタワルパの処刑図が、実際には絞首であるにもかかわらず、斬首である理由について、死者の頭が農作物の豊穰とかかわるというアンデス文化のコンテキストが示唆される。また、ポマのインカ族とチャンカ族の対立と戦争の記述がきわめて簡略であり、また両者の対立が他の記録者とはことなっており、第1代インカ王マンコ・カパックにさかのぼる背景に、ポマがチャンカ族の領域であった地方の出身であるという社会的コンテキストの存在が指摘される。

一方、ポマのテキストをテキストとして読むとき、ポマとパチャクティ・ヤムキのテキストが、同一のテキストに依存しながらも、意図する意味もテキストの提示のしかたもことなると、友枝は論じる。パチャクティ・ヤムキのテキストがインカにかんする事柄の記述がその生起する順にしたがった統辞構成であるのにたいし、ポマのそれは、項目にわけて記述する範列構成をとっている。そして、ポマが範列構成をとった明示的なテキストをうみだした意図は、スペイン人による植民地支配に抗議し、あらたなアンデスの社会秩序を提言するという、きわめて政治的なものであると、友枝は指摘する。

「16世紀の後半という時期、つまり、ヨーロッパにおいてすらまだ文字

が普及したと言えない時代に、一人のインディオ知識人は、文字、テキスト、エクリチュールの何たるかを見抜いていた。たしかにポマの『新しい記録と良き統治』は、(中略)権力や闘争が生み出す純粋なエクリチュールの典型であり、優れて政治的なエクリチュールなのである。」(p. 271)

以上、かんたんに紹介してきた本書には、ささいな点ではいくつかの問題がみいだされる。「ミンカ」(p. 60。「アイニ・ミンカ」が適当)、「田畑」(p. 104など。「畑」ないし「耕地」)、「古文書館」(p. 175。「文書館」)の用語には、検討の必要がある。また、植民地時代初期のアンデスにおける混血人口についての染田の議論(pp. 183-185)には、いくつかの疑問がのこる。アレキパは海岸部にふくめるのが適当であろうし、ロペス・デ・ベラスコが「400家族」のスペイン人が居住していたとする山岳地方のポトシが無視されている。さらに、染田は、当時のアンデスにおけるスペイン人口は山岳地方におおかったとするが、彼自身の提出している数字は、むしろスペイン人の大半が海岸部に居住していたことをしめしている。また、混血は、たんにスペイン人人口の大小のみによっておこるものではないことは、いうまでもないだろう。

しかしながら、本書は、全体として、著者たちの目標が十分に達成されたものとなっている。染田と友枝の協力によって、「文字をもたなかったアンデス世界に生を受けた一人のインディオ」ポマによる「キリスト教布教と先住民インディオの改宗化(中略)の大義名分に異議を唱え、スペイン人支配を厳しく糾弾する浩瀚な文書」(p. ii)がテキストとして読み解かれ、ポマのもつアンデスの文化的背景とイデオロギーにまでさかのぼって、本書の副題にある「インディオが描いた《真実》」とその意味が解明されている。

本書は、スペインの「征服」と植民地支配の時期の原住民社会・文化の変容とその意味とについて、ゆたかな成果を期待させるあらたな研究の方向をしめすものといえる。